

第5章 総括

第1節 遺構

(1) 1面 調査成果

A区・B区・C区の各調査区の遺構数は、A区では、SK(土坑)12基、SD(溝)69条、SP(ピット)37基、SX(不明遺構)4基、B区では、SK(土坑)13基、SD(溝)16条、SP(ピット)17基、SX(不明遺構)1基、C区では、SD(溝)16条、SP(ピット)6基が確認できた。さらにA区・B区にまたがるNR(自然流路)1条が確認できた。

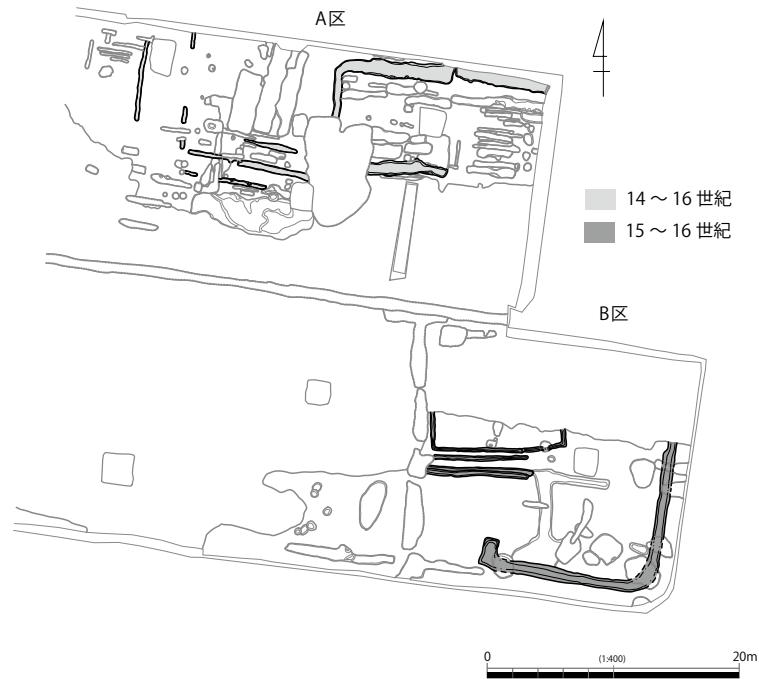
特徴的な遺構としては、区画溝(屋敷溝)や道路状遺構が確認できた(第20表)。A区では、北東に区画溝(屋敷溝)、南北～東西方向に道路状遺構が位置する。B区では、南東に区画溝(屋敷溝)、その北西に小規模な区画溝(屋敷溝)、東西方向に道路状遺構が位置する(第57図)。中世における屋敷の構成は、母屋・小屋・馬小屋・厩などが屋敷地を隅丸方形に囲う溝の内側(内部)に配置されるのが一般的である(第58図)。本遺跡では、屋敷溝の内側(内部)に掘立柱建物の存在が確認できないことから、母屋や小屋などの建物については礎石建物であったことが予想でき、昭和40年代に実施された大規模な土地改良事業による農地整備の時に、礎石などの部分が消失してしまったことが考えられる。確認できた区画溝(屋敷溝)も、溝の底部のみが残存したものと考えられる。

また、人々が生活する上で水は必要不可欠であり井戸の存在が欠かせない。しかし本遺跡では、屋敷溝の内側(内部)に井戸が確認されていないことから、屋敷の外側に存在し共同で使用していたか、本遺跡の西側に五条川が流れておりそこから水を確保していたと想定される。

本遺跡の北西に「井上城(井上屋敷)」(1394～1441年)が存在する。A区の屋敷溝が14～16世紀、B区の屋敷溝が15～16世紀に相当すると考えられることから、北から南へと土地利用がなされていったことが予測できる。また、道路状遺構は区画溝(屋敷溝)の西側で確認されており、「井上城(井上屋敷)」に繋がる道とも考えられ、その関わりが考えられる。

第20表 区画溝(屋敷溝)・道路状遺構一覧表

区画溝(屋敷溝)									道路状遺構								
調査地区	遺構種別	遺構番号	方位	規模				時期	調査地区	遺構種別	遺構番号	方位	規模				時期
			北から (溝方向)	長軸 (桁行) (m)	短軸 (梁行) (m)	面積 (㎡)	深さ (m)					北から (溝方向)	長軸 (桁行) (m)	短軸 (梁行) (m)	面積 (㎡)	深さ (m)	
A-1	SD	002	東西～南北	(12.57)	1.25	—	0.11	14～16世紀	A-1	SD	100	南北	(1.25)	0.28	—	0.02	14～16世紀
A-1	SD	003	東西	(7.50)	(0.90)	—	0.10	14～16世紀	A-1	SD	101	南北	1.30	0.32	—	0.04	14～16世紀
A-1	SD	039	東西	(6.18)	1.00	—	0.14	14～16世紀	A-1	SD	102	南北	(0.64)	0.38	—	0.04	14～16世紀
B-1	SD	023	東西～南北	(13.61)	1.14	—	0.23	15～16世紀	A-1	SD	103	南北	(6.42)	0.29	—	0.03	14～16世紀
B-1	SD	027	東西～南北	(7.26)	0.27	—	0.09	15～16世紀	A-1	SD	104	南北	4.30	0.52	—	0.03	14～16世紀
B-1	SD	028	東西～南北	(3.58)	0.34	—	0.13	15～16世紀	A-1	SD	105	南北	(3.78)	0.39	—	0.04	14～16世紀
									A-1	SD	106	南北	(5.73)	0.55	—	0.04	14～16世紀
									A-1	SD	107	南北	(1.05)	0.29	—	0.02	14～16世紀
									A-1	SD	108	南北	(3.81)	0.34	—	0.19	14～16世紀
									B-1	SD	024	東西	(8.14)	0.39	—	0.08	15～16世紀
									B-1	SD	025	東西	(8.43)	(0.25)	—	0.11	15～16世紀
									B-1	SD	026	東西	(7.47)	0.35	—	0.13	15～16世紀



第57図 区画溝(屋敷溝)・道路状遺構変遷図



第58図 武士の館
 (『知るほど楽しい鎌倉時代』(多賀譲治・理工図書)より引用)

(2) 2面 調査成果

A区・B区・C区の各調査区の遺構数は、A区では、SK(土坑) 2基、SD(溝) 4条、SX(不明遺構) 2基、B区では、SI(竪穴建物) 1棟、SD(溝) 3条、SP(ピット) 5基、C区では、SD(溝) 4条が確認できた。さらにA区・B区では、1面から継続するNR(自然流路) 1条が確認されている。

特徴的な遺構としてB区のSI045があげられる。建物の北側半分はNR001(旧河道)により削平されているが、出土遺物から平安時代に相当する。平安時代に小規模ながら集落が営まれていたことが推測できる。また出土した土器片から、本遺跡とその周囲に弥生時代～平安時代にかけて集落が営まれていたことも予測できる。

(3) NR001(旧河道)

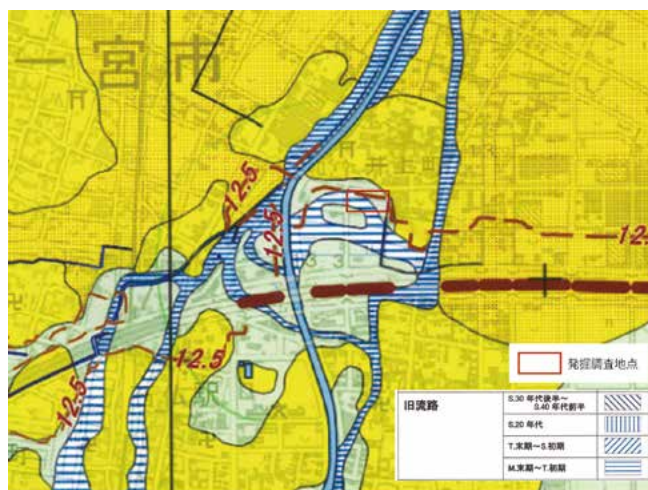
今回の発掘調査によって、明治から大正年間にかけての時期と推定される大規模な河川(流路)の存在が確認できた。

国土地理院の『治水地形分類図』(第3章第2節：註①参照、第59図)で調査区に該当する場所に「旧流路」の存在が確認でき、時期は「M.末期～T.末期」とする記載が認められる。『治水地形分類図』での本河道の地点は、本流となる二つの河川の間を繋ぐように中州を有して東西に湾曲して延びる流路として描かれており、今回の発掘調査で確認できたNR001(旧河道)も同様に東西に湾曲して延びる平面形状であり、まさに様相が一致する。

また、天保12(1841)年に作成された『天保村絵図』の「井上村」、弘化2(1845)年の作成とされる『村絵図』の「井上村」(第60図)によれば、本河道の地点は「田畑」である。江戸時代の「井上村」は、江戸時代前期の寛文年間(1661～1673年)に編纂された『寛文村々覚書』では「田畑580畝14歩、家数15、人数80、馬数6、社1」(580畝14歩＝約57,639.8㎡)、江戸時代後期の文政5(1822)年頃に編纂された『尾張徇行記』では「田畑566畝14歩、家数19、人数93、馬数3」(566畝14歩＝約56,065.25㎡)と記述されており、小規模な村であったことがわかる(第61図)。NR001(旧河道)は、江戸時代末頃には田畑として利用されており、河川として機能していた時期は、遡っても明治年間(1868～1912年)内に留まると推定される。『治水地形分類図』の記載の通り、大正年間(1912～1926年)を中心に機能していた河川といえよう。

NR001(旧河道)からの土器破片の出土状況から考えて、本遺跡及び周辺に存在した弥生時代中期末頃～後期、古墳時代中期、飛鳥～奈良時代、戦国時代といった時期の集落遺跡を飲み込んでしまったことが想像できる。

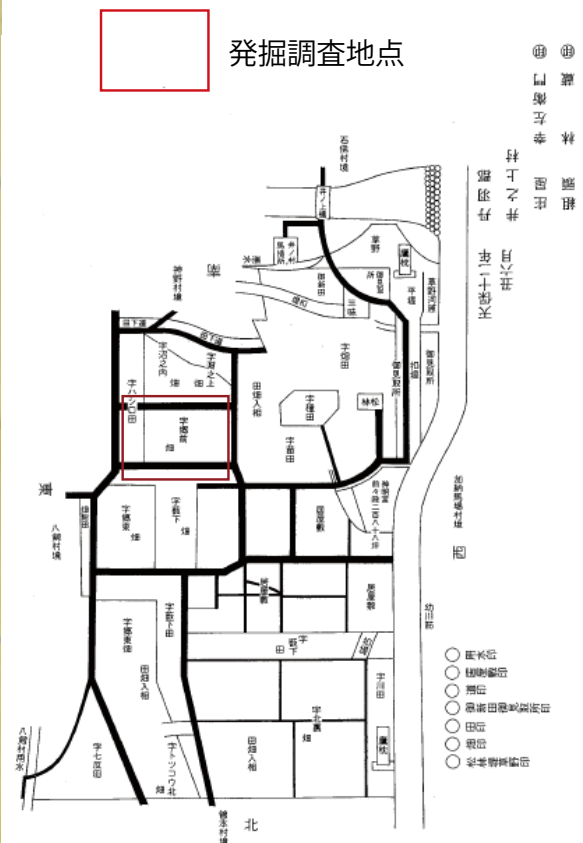
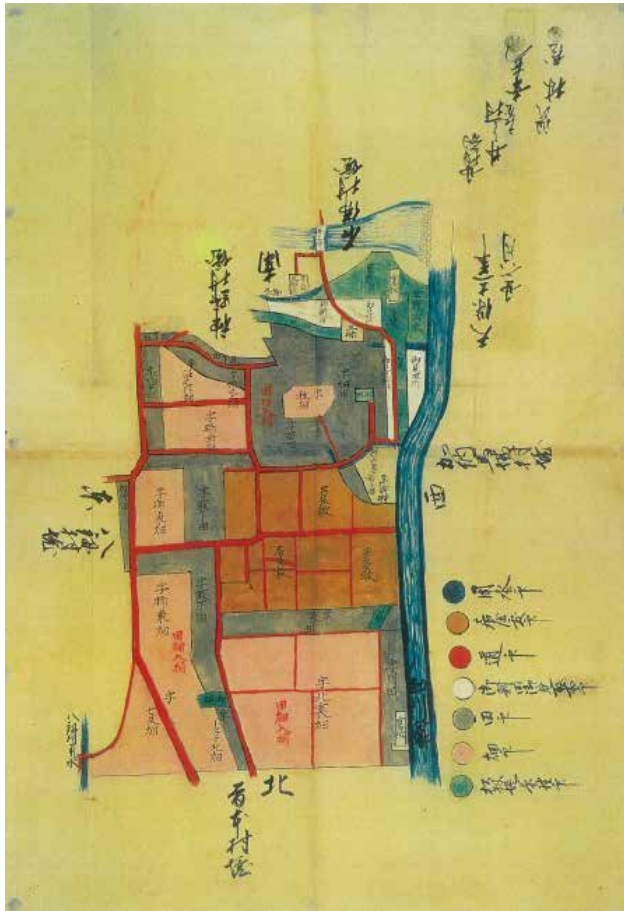
(基峰)



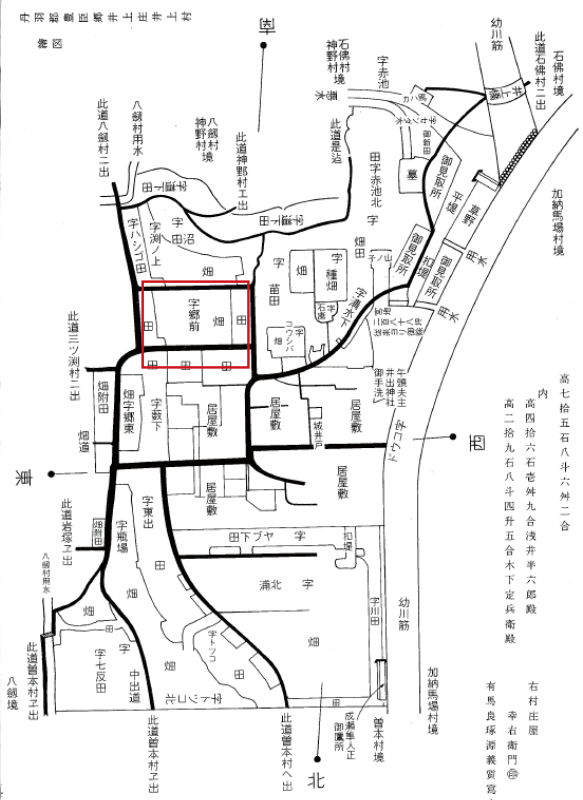
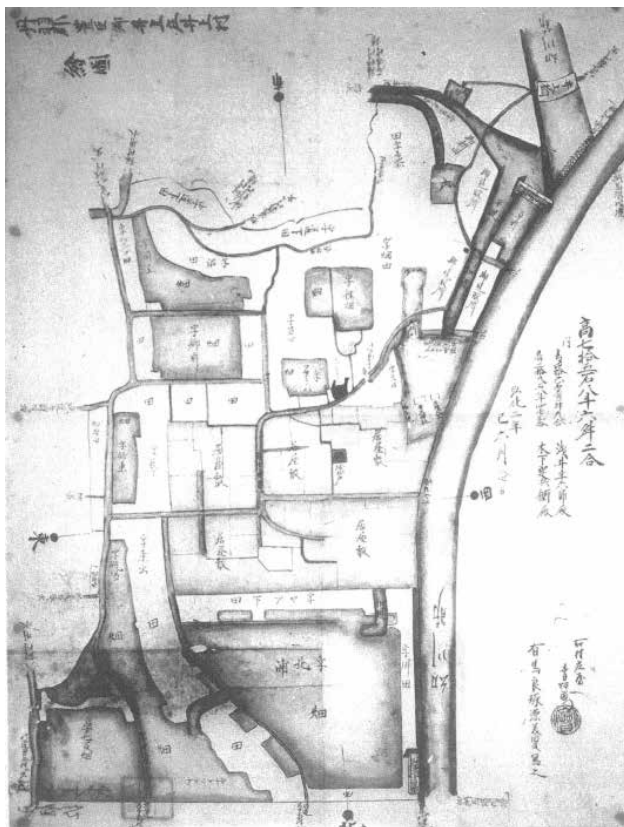
第59図 『治水地形分類図』と発掘調査地点
(国土交通省国土地理院HPより作成)



第61図 江戸時代の岩倉市域：「井上村」
(岩倉市1981.p91に加筆)



天保12(1841)年



弘化2(1845)年

第60図 江戸時代末頃の「井上村」(岩倉市1981 p.8-9 p.34-35に加筆)

第2節 遺物

(1) 弥生土器

今回の発掘調査では、A区・B区・C区の各調査区から弥生時代の土器が出土している。いずれも破片であるが、ここでは出土した弥生土器の特徴についてまとめたい。

中期：B区2面から甕または壺の口縁部が出土しており（151）、口縁端部に連続刺突が施された唯一の中期末頃（高蔵式期）まで遡れる土器といえる。

後期：図化した弥生土器25点中の24点が後期（山中式期）に属する土器である。出土地点の内訳は、1面（上層）でA区9点、B区6点、C区2点の合計17点、2面（下層）でA区2点、B区3点、C区2点の合計7点で、1面（上層）からの出土が全体の約7割となる。遺構に伴うと判断できる土器は無く、A区1面SD003（3）、A区1面SD077（20）、A区1面SD085（21）、A区1面SP078（38）、B区1面SD003（86）、B区1面SD023（89・90）、C区1面SD007（179・180）から出土した土器は、遺構の年代を考えると覆土中に混入したものと考えられる。

器種別で見ると台付甕5点、甕4点、壺3点、壺または高坏1点、高坏9点、器台1点、高坏または器台1点で、甕と壺が全体の約6割、高坏・器台が全体の4割以上を占め、弥生時代後期の一般的な集落出土の土器の器種傾向と一致する。

成形・調整・装飾としては、全体的に破片で摩耗が進んでいるが、いくつかの特徴が確認できた。台付甕ではユビオサエ（3・180）やハケ（45・101）、甕ではハケ（20・21）、壺や高坏ではナデ（46・86・89）、器台ではミガキ（100・129）が施され、高坏または器台及び壺または高坏の内面（100・237）と高坏の外表面（148・149）、壺の口縁端部（223）の合計5点の土器で赤彩痕が確認できた。また、壺の肩部外表面に連続刺突が施されたもの（90）や、甕の口縁部外表面にて靱殻圧痕が確認できたもの（102）がある。

山中式期の土器は、前代の高蔵式期の土器の器種や成形・調整・装飾を引き継いだ地域性の強いものであるが、その特徴として器種の多様化、赤彩土器がある。その出現には、近畿地方（畿内第Ⅴ様式）の土器との共通性が認められることから、その影響によって成立したと考えられている。今回の調査で出土した後期の土器では、赤彩土器が全体の4割を占めており、その特徴と一致する。

今回の発掘調査では、弥生時代の集落に関連した遺構を確認することができなかった。遺構外から出土した弥生土器の大半が、NR001（旧河道）によって流されてきた可能性が高く、本遺跡及びその周辺に、弥生時代中期末頃～後期にかけての集落が展開していたことは間違いないであろう。

(2) 須恵器・灰釉陶器

ここでは、A区・B区・C区の各調査区から出土した須恵器及び灰釉陶器の特徴についてまとめたい。いずれも出土したものは破片である。

【須恵器】A区・B区・C区の1面から出土したものは、瓶または壺、壺、甕、坏蓋、坏身、蓋、皿といった器種が見られ、5・6世紀まで遡るもの（82・87・182）や8・9世紀まで下るもの（57・80・85・106）があるが、概ね7世紀を中心としたものが多い。一方、A区・B区・C区の2面から出土したものは、壺、瓶、甕、高坏、器台といった器種が見られ、5世紀まで遡るもの（122・130）や7・8世紀まで下るもの（153～156・224・225）はあるが、概ね6世紀を中心としたものが多い。

【灰釉陶器】須恵器に比べて出土量が少なくなる。A区・B区・C区の1面から出土した器種は、瓶、碗、皿、四足壺である。8世紀後半まで遡るもの（108・186）や10世紀まで下るもの（110・207）があるが、概ね9世紀を中心とする。一方、C区の2面からは坏または皿、碗の器種が出土している。C区2面出土の8世紀後半～9世紀の坏または皿（228）は、灯明皿として使用されていたと考えられる。

今回の発掘調査で出土した須恵器・灰釉陶器からは、5～10世紀（古墳時代中期～平安時代）にかけて本遺跡及びその周辺において集落が展開していたことは確実と考えられる。特に6・7世紀（古墳時代後期～飛鳥時代）にかけて集落の規模が大きく展開していたことが予想できる。遺構外から出土した須恵器・灰釉陶器については、弥生時代の集落と同様に、NR001（旧河道）によって流されてきた可能性が高いといえよう。

（3）山茶碗

ここでは、A区・B区・C区の各調査区から出土した山茶碗の年代観から、本遺跡の中心となる中世における集落（屋敷）の様相を予測したい。

A区1面SD002・SD003・SD039は14～16世紀、B区1面SD023・SD027・SD028は15～16世紀にかけての区画溝で、その形状から屋敷溝と考えられる。本遺跡では、中世後半に屋敷地として土地利用がなされていたことが推定できる。

A区・B区・C区の1面から出土した山茶碗は、遺構外から出土した碗（60）が最も古く12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。1面の遺構出土では、13世紀（12・36・83・171）、15世紀（208）、15～16世紀（84）、16世紀（1・17～19・43）である。1面の遺構外からの出土では、前述の碗（60）を除き、13世紀（61・62・64）、15世紀（112・113）、16世紀（63・65）である。

一方、A区・B区・C区の2面から出土した山茶碗は、2面の遺構出土では15世紀（220）、2面の遺構外からの出土では、13世紀（135・160・161・230）、14世紀（136）、15世紀（137～141・162）である。A区2面の遺構外から出土の碗（140）は墨書土器である。

出土した山茶碗の年代観を見る限り、本遺跡及びその周辺において13～16世紀（鎌倉～戦国時代）にかけて、集落が展開していたことが考えられる。他の土器破片と同様に、遺構外から出土した山茶碗については、NR001（旧河道）によって流されてきた可能性が高いといえる。

特に中世前半（13世紀）では、本遺跡よりもその周囲に集落が展開していたことが考えられ、本遺跡の北西に隣接する「井上城（井上屋敷）」の展開と深く関わりがあったことが予想される。このことは、中世の屋敷地利用として、本遺跡で北から南へと屋敷地の利用が変遷することとも一致する。

（4）天目茶碗

今回の調査で、いずれも破片であるが天目茶碗5点の出土が確認できた。天目茶碗は、茶道具として用いられた陶器製の茶碗で、鉄釉をかけて焼かれたものが一般的である。

いずれもA区・B区・C区の1面からの出土である。遺構から出土したものは、B区1面SK006（79）、C区1面SD007（189）で、他は遺構外から出土（66・114・115）である。66は外内面ともに鉄釉、79・114は内面に鉄釉、115は内面に錆釉、189は内面に施釉（透明）・外面に鉄釉が施されている。体部の成形はいずれも回転ヘラ削りで、高台の残る79・114・115・189ではヘラ削り出しで作られ、いずれもほかの碗と比べると丁寧な作りである。114が最も古く14世紀後半～15世紀、79は15世紀、66は15～16世紀で、中世後半（室町～戦国時代）に相当する。115は17～18世紀、189は18世紀で、

近世（江戸時代）に入ってからのものである。

遺構外から出土した天目茶碗については、NR001（旧河道）によって流されてきた可能性も考えられるが、本遺跡及びその周辺においては、中世後半（室町～戦国時代）以降の集落（屋敷）にて、茶道の文化が定着していたことを窺い知ることができる。

（基峰）

（5）ルス（呂宋瓶掛：獅子頭文）

ここでは、A区1面遺構外出土のルス(呂宋)瓶掛に施された獅子頭文について記したい。

「ルス（呂宋）」とは、江戸時代後期に瀬戸で作られた、全面に薄くムラなく均一に緑釉がかけられたやきもの（陶器）である。同様に釉薬がかけられたやきもの(陶器)である「織部焼」とは区別される。18世紀後半から19世紀にかけて生産され、江戸を中心に全国の遺跡から出土している(瀬戸市ほか2012)。本遺跡では、A区1面遺構外から獅子頭文1点(72)が出土した。外面に緑釉が施され内面は鉄釉でハケ塗りされる。上半部が欠損しているが、獅子の貼付文様と考えられる。また、ルス(呂宋)の器種は瓶掛、植木鉢、水鉢、水壺、火入、皿、茶碗などがあるが、ルス(呂宋)の瓶掛に貼付文様として獅子頭文が多く用いられていることから、本遺物もルス瓶掛の貼付文様であると思われる。主な貼付文様として獅子頭文は2種類あるが（第62図）、本遺跡からの出土遺物は顔の回りに渦巻きが施されていることから、第62図左の装飾に相当する。近隣の遺跡からの出土としては、清須市外町遺跡、名古屋市貞養院遺跡が知られ、獅子頭文が貼付されたルス瓶掛が出土しており（第63図）、本遺物と顔の特徴が同じである。

江戸時代後期の「井上村絵図」などによれば、本遺跡は「田畑」として利活用されていたことが伺い知れるが、ルス瓶掛の出土は、本遺跡が「田畑」のみに限らずその周辺が屋敷地として利活用されていたことが考えられ、周辺の屋敷地と本遺跡との関わりが想定される。

（三島）



第62図 獅子頭文（瀬戸市ほか2012より）



第63図 外町遺跡(左2つ)・貞養院遺跡(右)出土瓶掛（愛知県埋文1994、名古屋市博2008より）

【追記：獅子】

平安時代の文献に「獅子・狛犬」という記載があり、獅子は唐獅子、狛犬は高麗犬・胡麻犬とも表現され、「唐」はまさに古代中国を指した国名で、「狛」は朝鮮半島だけではなく広く中国大陆の周辺を指した言葉と考えられる。中国大陆に獅子は生息していないが、古代中国での獅子＝ライオンは、古代オリエントより伝わったものと考えられている。西域の古代文明では、ライオンは特別な地位を持った動物として認識され、古代エジプトの王の墓で見つかった玉座にもデザインされ、墓を守るスフィンクスの身体はまさにライオンである。獅子に限らず、古代中国では龍や麒麟などの多くの想像上の霊獣が創出されている。

また仏典では、獅子は「師子」と表され、仏の座る座を「師子座」と称し、床や地であろうと仏の座る場所は師子座と呼ばれる。古代インドの仏像（3世紀頃）の台座には獅子の像が表される場合が多く、獅子は仏の守護とともにその威光を象徴する存在といえる。古代中国においても仏像の台座に一對の獅子が表されているものが見られ（北魏：6世紀頃）、仏の守護獣という性格がより強く感じられる。さらに日本では、文殊菩薩が獅子の上に乗って表現されている（11世紀頃）。

本遺跡の所在する尾張の地域では、鎌倉時代（13世紀）に入ると、瀬戸で陶製狛犬の製作が広く普及した（井上喜久男2010）。江戸時代（17世紀）に入ると日本では獅子・狛犬とともに「狛犬」と呼ぶことが定着し、日本に存在しない生き物ではあるが、日本の風土によく馴染み、神社などに欠かせない存在となっている。沖縄では魔除けの性格を有し、「シーサー」と呼ばれている。獅子＝ライオンの基層は、古代オリエントからインド・中国を経由して日本へと伝わった東西文化から生み出された産物といえ、日本文化として広く定着をなしたといえる。

（基峰）

【引用・参考文献】（第4章以外）

- 愛知県 2010『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～古代
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集 清洲城下町Ⅲ・外町遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 権現山遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2007『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第141集 伝法寺野田遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2011『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集 御山寺遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2013『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第198集 下新田遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2016『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第203集 伝法寺野田遺跡Ⅱ』
- 伊東史朗 1989「狛犬」『日本の美術』No.279 至文堂
- 井上喜久男 2010「瀬戸窯における陶製狛犬の製作年代」『愛知県陶磁資料館研究紀要』15
- 岩倉市 1981『岩倉市史』資料1 近世村絵図 金石文
- 岩倉市 1985『岩倉市史』上巻
- 岩倉市教育委員会・株式会社アーキジオ 2023『下田南遺跡発掘調査報告書-川井町野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-本文編』
- 岩倉市教育委員会・株式会社イビソク 2024『御山寺遺跡発掘調査報告書』
- 蔭山誠一・鬼頭剛・鈴木正貴 2015「五条川流域の河道変遷と岩倉の歴史景観」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 愛知県埋蔵文化財センター
- 国土交通省国土地理院ホームページ (https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/fc_index.html)
- 瀬戸市、(財)瀬戸市文化振興財団 2012『瀬戸蔵ミュージアム企画展 ルス(呂宋)とよばれたやきもの～近世瀬戸の新たな試み～』
- 多賀譲治 2011『知るほど楽しい鎌倉時代』理工図書
- 名古屋博物館 2008『特別展 尾張名古屋は地下で待つ 城下町大発掘』

写真図版 1



A区1面 完掘状況（上が北）



A区1面 東側完掘状況（北東から）

写真図版 2



A区1面SP061 柱根出土状況（東から）



A区1面SP061 完掘全景（南から）



A区1面SD002a-a' 土層断面（西から）



A区1面SD002b-b' 土層断面（南西から）



A区1面SD003 土層断面（西から）



A区1面SD002・SD003 完掘状況（西から）



A区1面SD004 石出土状況（南西から）



A区1面SD028 遺物出土状況（北西から）

写真図版 3



A区1面SD039・SD040 土層断面 (西から)



A区1面SD039 完掘全景 (北から)



A区1面SD100 土層断面 (南から)



A区1面SD100 完掘全景 (南から)



A区1面SD101 土層断面 (南から)



A区1面SD102 土層断面 (南から)



A区1面SD102 完掘全景 (南から)



A区1面SD103a-a' 土層断面 (南から)

写真図版 4



A区1面SD103 完掘全景 (南から)



A区1面SD104 土層断面 (西から)



A区1面SD105 土層断面 (西から)



A区1面SD106 土層断面 (西から)



A区1面SD107 土層断面 (西から)



A区1面SD079・SD080・SD108 土層断面 (西から)



A区1面NR001西側トレンチ 土層断面 (南西から)



A区1面NR001東側トレンチ 土層断面 (北西から)

写真図版 5



A区2面 完掘全景（上が北）



A区2面SX119 遺物出土状況（南西から）

写真図版 6



A区2面SX119 土層断面 (東から)



A区2面SX119 完掘全景 (東から)

写真図版 7



A区2面NR001 検出状況 (南東から)



A区2面 北壁(NR001) (南から)

写真図版 8



B区1面 東側検出状況（上が北）



B区1面SD023a-a' 土層断面（南東から）



B区1面SD023b-b' 土層断面（西から）



B区1面SD023c-c' 土層断面（南から）



B区1面SD023 完掘全景（西から）

写真図版 9



B区1面 東側完掘状況（上が北）



B区1面SD023 完掘全景（南西から）



B区1面SD023 完掘全景（北東から）



B区1面SD024・SD025 土層断面（西から）



B区1面SD024 杭出土状況（南東から）

写真図版 10



B区1面SD024～SD028 完掘全景 (西から)



B区1面SD026・SD027 土層断面 (西から)



B区1面SD027a-a' 土層断面 (南から)



B区1面SD028b-b' 土層断面 (南から)



B区1面SD024～SD028 完掘全景 (北東から)

写真図版 11



B区2面SI045 土層断面 (北西から)



B区2面SI045 完掘全景 (南西から)



B区2面NR001 杭出土状況 (南から)



B区2面NR001南北トレンチ 土層断面 (南西から)



B区2面 基本層序 (南壁) (北から)

写真図版 12



C区1面 西側・南側完掘状況（上が北）



C区1面SD006 遺物出土状況（南西から）



C区1面SD006・SD007 遺物出土状況（南西から）



C区1面SD006・SD007 遺物出土状況（北東から）



C区1面SD006 土層断面（北西から）

写真図版 13



C区1面 南側完掘状況（北東から）



C区1面SD006 完掘全景（北から）



C区1面SD007b-b' 土層断面（西から）



C区1面SD007 完掘全景（南西から）



C区1面SD017 古銭出土状況（西から）

写真図版 14



C区2面 東側完掘状況（北から）



C区2面 基本層序（南壁）（北から）

写真図版 15



C区2面SD020 土層断面 (西から)



C区2面SD020 完掘全景 (北から)

写真図版 16



A区1面 出土遺物(1)

1:SK059 2:SD002 3~5:SD003 6:SD004 7~8:SD005 9:SD028
10:SD029 11~13:SD039 14~15:SD052 16~18:SD053
19:SD055 20:SD077 21:SD085 22~29:SD112

写真図版 17



A区1面 出土遺物(2)

30~35:SD112 36:SP034 37:SP075 38~41:SP078 42: SX043 43: SX058
44~55:遺構外

写真図版 18



写真図版 19



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99

B区1面 出土遺物(1)

78:SK004 79:SK006 80・81:SK008 82~84:SK010 85:SK014
86~88:SD003 89~95:SD023 96:SD024 97:SD026
98:SP029 99:SP032

写真図版 20



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121

写真図版 21



A区2面 出土遺物

121:SK121 122~124:SK123 125~126:SD118 127: SX119
128~145:遺構外

写真図版 22



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169

B区2面 出土遺物

146:SI045 147:SD051 148~169:遺構外

写真図版 23



170



171



172



173



174



175



176



178



177



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188



189



190



191

C区1面 出土遺物(1)

170~178:SD006 179~191:SD007

写真図版 24



192



193



194



195



196



197



198



202



199



200



201



203



205



204



206



207



208



209



210



211

C区1面 出土遺物(2)

192~201:SD007 202:SD008 203~206:SD009 207:SD014 208~211:SD017

写真図版 25



C区1面 出土遺物(3)・C区2面 出土遺物

C区1面 212:SD017 213~215:SD018 216~219:遺構外
C区2面 220~221:SD020 222~236:遺構外

写真図版 26



報告書抄録

ふりがな	はただいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書 名	畑田遺跡発掘調査報告書							
副書名	五条川小学校区統合保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	平松久和（岩倉市教育委員会） 三島ゆかり、基峰修（株式会社アーキジオ） 森将志、鈴木茂、石川智、伊藤茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtadize、小林克也、 バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）、森勇一（東海シニア自然大学）							
編集機関	株式会社アーキジオ中日本支店							
所在地	〒483-8166 愛知県江南市赤童子町南山98 TEL0587-50-6770							
発行機関	岩倉市教育委員会							
所在地	〒482-8686 愛知県岩倉市栄町一丁目66 TEL0587-66-1111							
発行年月日	西暦2026年 3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
はただいせき 畑田遺跡	あいちけん いわくらし 愛知県岩倉市 いのうえちょう 井上町	232289	110057	35度 17分 55秒	136度 52分 33秒	20240613 ～ 20241226	6,602㎡	保育園建設用地開発
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
畑田遺跡	集落跡	平安 鎌倉 室町 ～ 戦国 江戸	竪穴建物 土坑 溝（区画溝） 道路状遺構 ピット 不明遺構	弥生土器、須恵器、 土師器、灰釉陶器、 山茶碗、天目茶碗、 陶磁器、土錘、板材、 木杭等		1面・2面の2層を基準に調査を実施した。1面で室町～戦国時代の区画溝（屋敷溝）等、2面で平安時代の竪穴建物等が確認できた。		
要 約	畑田遺跡は、五条川左岸の自然堤防上に形成された平安時代及び室町～戦国時代の集落遺跡である。 本調査（A区・B区・C区）では、1面・2面の2層を基準に発掘調査を実施した。1面では、室町～戦国時代にかけての区画溝（屋敷溝）のほか、土坑、道路状遺構、溝、ピット等の遺構が確認できた。2面では平安時代の竪穴建物等の遺構が確認できた。 遺物は、弥生時代中期～後期の土器、古墳時代中期～飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器、奈良・平安時代の灰釉陶器、鎌倉～戦国時代の山茶碗・天目茶碗・陶器のほか、江戸時代の陶磁器が出土した。山茶碗の碗1点は墨書土器であった。 出土した遺構・遺物から、北に隣接する井上城（井上屋敷）との関連が窺い知れる。 調査区の大半が、明治末頃～大正年間と推定される旧河道（NR001）によって浸食され、押し流されていたことも判明した。							

畑田遺跡発掘調査報告書

－ 五条川小学校区統合保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

発行日	2026（令和8）年3月17日
編集・発行	岩倉市教育委員会生涯学習課 〒482-8686 愛知県岩倉市栄町一丁目66番地 TEL 0587-66-1111 株式会社アーキジオ中日本支店 〒483-8166 愛知県江南市赤童子町南山98番地 TEL 0587-50-6770
印刷	株式会社 トーザワ